

戦後日中関係における天皇訪中問題

| | |
|----------|---|
| 著者 | ? 奇武 |
| ファイル(説明) | 博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨 |
| 学位授与番号 | 17701甲人社研第40号 |
| URL | http://hdl.handle.net/10232/00031484 |

令和2年1月30日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 蔣 奇武

学位論文題目

戦後日中関係における天皇訪中間題

(The Issue of the Japanese Emperor's Visit to China in Post-war Sino-Japanese Relations)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を令和元年12月25日に行った。最初に蔣奇武氏により、提出論文の概要について説明がなされ、その後試験委員との間で質疑応答がなされた。

試験委員からは、まず最初に、本論文の学術的な位置づけについての質問がなされた。論文では、分析の対象と目的についての説明がなされているものの、学説史とも関連づけてどのような学術的な意義があるのか説明が求められた。これに対して蔣氏は、本論文は日中両国の天皇制研究、日中関係史研究の両者を検討し、その欠落部分である天安門事件と天皇の政治利用という二つの観点に着目したものであるとの回答があった。この論点と関連して、皇室外交というより広い視点から天皇訪中間題を捉えてみる必要があったのではないかと意見が出され、蔣氏もこの点については論文では扱っておらず、今後の課題であると述べた。

次に具体的な分析についての質問・意見が試験委員から出された。とくに、この論文で強調されているソ連要因について、確かにソ連要因の重要性について説得的に説明がなされているが、逆にソ連要因以外の問題が軽視されているのではないか。この点につ

いてどのように考えるのか、との質問が出された。これに対して蒋氏は、中国においては保守派の存在、日本でも自民党内の反対派の存在など、国内政治の要因も大きな影響を与えたと説明したが、日本外交における対韓政策との関連など、十分に論じていない点もあると述べた。

以上の点以外にも、天皇訪中に至る日中両政府の対応について種々質問があり、蒋氏による回答がなされた。

蒋氏との質疑応答を終え、試験委員による協議を行った。学術的な位置づけにおいて踏み込みが不足している点などの問題を指摘することができるが、学説の丹念な検討を行ない、それを踏まえての回答を行っており、また、分析内容に対する質問にも適切に回答していること、さらに試験委員からの意見を率直に受け止め、自身の研究課題として主体的に考えようとしている点が評価された。

以上により、学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合 否

試験委員

主査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 城中秀之

副査 (氏名) 太田一郎

副査 (氏名) 出水薫